名ヅク、其子朝鮮ヨリ來ル、故ニ朝鮮紫蘇トモ云、食品ニモ藥ニモ可レ用レ之、汗ヲ少シ發ス、故ニ輕症ニ麻黄ニ代用ユ、他ノ紫蘇ノ苗ト子トヲステヽ、是ヲ可レ種、秋實ノリタル時卽地ニ蒔ベシ易レ生、春マケバ生ジガタク消ヤスシ、

紫蘇栽培

〔農業全書四菜〕紫蘇

しそは八九月たねを收め置て、正月熟地に苗床を作りて、灰沙に合せ、うすく蒔てこえを少かけ、土を少しおほひをくべし、あつくば間引て、莖短くふときを、三月畦作りし、肥地ならば、間を遠くうゆべし、

〔成形圖說二十五菜〕奴加延三代實錄○中略紫蘇名醫別錄○中略

此もの性濕地を好む、春月種子を布べし、その佳なるものは葉に皺ありて鋸齒深く、表裏紫色なり、俗にこれを綢紗紫蘇（チリメン）といふ、梅儲（ウメヅケ）及藥用に此をよしとす、よろしく花穗を發せざる內に、その葉を收めとるべし、あるひは地の乾疲（ヤセ）たるによりて、表青色に變ずるものあり、かゝるものはおのづから芳香も薄し、また一種表裏ともに青色往葉の如くにし、芳香よろしきものあり、東都の俗にあるひは青紫蘇といふ、按に農圃六書に白蘇といへるもの是にや、○略註今藥用のものは、山城紀伊、相模よりいだす、また東都の官園にて養なふものあり、性味ことにまされり、去かれども民間に稀なり、その子は關東にては、武藏處澤よりいだす、あるひは荏子をもて僞り充るもあり、

紫蘇利用

〔藥經太素下〕紫蘇　温味辛

裏面トモニ紫色成ヲ用、枝莖ヲ去、日ニ干モミ研テ用、下レ氣開レ胃治レ脹消レ痰利二大腸一若寬喘欬子尤吉、又脚氣ヲ治ス、

〔宜禁本草乾五菜〕紫蘇　辛温、日用本草曰、純紫尤佳、證類本草、葉下紫氣甚香、與二鯖鮓一同食、腸中生レ瘕成レ疝、子主二上氣欬逆、腰脚濕風結氣一、葉下レ氣除寒、治二心腹脹滿、霍亂轉筋一、開レ胃下レ食通二大小腸一、子調二中下一レ氣、主二嘔吐反胃、肥二建人一、利二